

国際宇宙ステーション長期滞在ミッション報告会
古川元久宇宙開発担当大臣スピーチ
(平成24年1月16日、渋谷区文化総合センター大和田)

(はじめに)

皆様、こんばんは。宇宙開発担当大臣をいたしております古川元久でございます。

本日はお招きをいただきまして、誠にありがとうございます。古川宇宙飛行士、本当にご苦労様でございました。無事帰還されましたことを、私、同じ「古川」でございまして、心から嬉しく、そして日本人として大変誇りに思っております。

一昨年に帰還いたしました小惑星探査機「はやぶさ」や、昨年12月の打ち上げ成功で、20回中19回と打ち上げ成功記録をさらに伸ばしたH2Aロケットなどとともに、今回の古川宇宙飛行士の国際宇宙ステーションでの長期滞在と無事の帰還は、私たちに大きな自信と、そして希望を与えてくれました。

本日は、せっかくの機会でございますので、宇宙開発担当大臣として、宇宙開発がいかに大きな夢にあふれているか、そして我が国がいかにこの分野に力を入れているかについて、少々お時間をいただいております。

(最先端にある日本の宇宙技術)

皆さんご存知の通り、日本の宇宙技術は世界でも最先端レベルにあります。

古川宇宙飛行士が滞在した国際宇宙ステーションでは、有人実験施設「きぼう」や宇宙ステーション補給機「こうのとり」などが重要な役割を果たしており、その高い技術力は、古川宇宙飛行士を始めとする日本人宇宙飛行士の活躍と併せて、国際的に高い評価を得ています。

また、地球観測の分野でも、温室効果ガス観測衛星「いぶき」が二酸化炭素濃度分布を高い精度で推定し、地球温暖化防止に大きな貢献をしています。さらに陸域観測衛星「だいち」は、森林の保全や農業分野で活用されたほか、東日本大震災の際には被災地の状況を把握するなど、災害対応においても大きな役割を果たしました。

さらに測位の分野では、実用準天頂衛星システムの整備により、自動車、鉄道、航空機等の運行支援や農業機械・建設機械の自動運行が可能となり、アジア太平洋地域をカバーする大きなインフラとして貢献することが期待されています。

(大きく広がる私たちの地球)

さて地球の上空3万6千キロの静止衛星軌道の内側には、約3千もの人工衛星があると言われております。この宇宙空間は、通信、放送や観測といった私たちの経済社会の様々な分野で活用されています。つまり、私たちの地球は3万6千キロまで地上から大きく広がっていると言えます。

同時にこの宇宙空間には、役割を終えた古い人工衛星やロケットから切り離された部品などの宇宙ゴミが、10cm以上のものだけでも約1万5千個、地球の周りを回っています。これらは猛スピードで人工衛星にぶつかる可能性があり、燃え尽きずに人の住む地域に落下してきたら、大惨事となる危険性もあります。

こうした宇宙ゴミの問題は、いまや大きく広がった地球の環境問題のひとつとして考え、ゴミを増やさない工夫やルール作りに取り組む必要があります。しかし、こうした問題は

1か国では解決できません。そこで宇宙の問題を議論する国際的な機関として、国連に宇宙空間平和利用委員会（コーパス）という組織があり、宇宙ゴミの問題は重要なテーマの一つとされています。

このコーパスの議長として今年、コーパスの50年間の歴史で初めて、日本人でJAXA出身の堀川康さんが着任いたします。是非、堀川さんにはこうした問題で世界をリードしてもらいたいと思います。もちろん私たちも全面的にサポートをしております。

（フロンティアへのチャレンジ）

また宇宙は、大きな空に広がる好奇心や憧れの対象であり、フロンティアとして挑戦の対象でもあります。宇宙開発に関して大きな目標を持ったり、多くの子供たちが宇宙飛行士になる夢を持つことは、日本の皆さんや若い人たちが希望を持ち、夢に向かって挑戦することにもつながり、それが日本全体の元気にもつながると思います。

そこで私は「日本人による有人火星探査」といった大きな目標を立ててはどうかと考えています。

人類はこれまで、科学や技術の進歩によって、夢を現実のものとしてきました。宇宙開発はまさにその代表例です。

こうした大きな目標を実現するために、一步一步確実な歩みを進めていくのです。そのためには宇宙ステーション補給機の大気圏再突入技術の開発や基幹エンジンの高度化、固体ロケットシステム技術の発展など、宇宙輸送システムの重要な基盤技術を整備していくことが必要です。また、最先端の宇宙技術をさらに成長させるためには、古川宇宙飛行士のような優秀な宇宙飛行士や高い技術を支える人材を育成していくことも大切であります。

最近アメリカでは、「スペースX社」という民間ロケット打ち上げベンチャーが活躍しています。わが国でも、こうした民間事業者による新たな挑戦を国としても応援していきたいと思います。「イノベーション」の実現のためには、分野を超えて新しい、若い人材が大胆な発想でチャレンジをすることが重要なのです。

（日本の宇宙産業の振興）

こうした宇宙開発利用を支えるのは、衛星、ロケットなどを製造する宇宙機器産業や宇宙利用産業といった宇宙産業です。日本の宇宙産業は、まだまだ伸びていく可能性にあふれています。

そのためには宇宙産業を政府の力だけで引っ張っていくのではなく、海外の需要を取り込み、民間事業者や研究者の力を活かしながら、日本の宇宙産業基盤を強化していかなければなりません。衛星をはじめとする宇宙関連の日本からの輸出ももっと増やしていけるはずです。

たとえば東南アジアには、地球観測衛星の導入を検討している国があり、農業分野の他、洪水、沿岸浸食の分野でも我が国は大きな貢献ができます。また、我が国は、衛星を用いてアジア地域の防災を強化する「ASEAN防災ネットワーク構築構想」を提案しています。今後は個々の設備や技術を輸出するだけでなく、事業の設計から運営までをも含めたシステムをパッケージとして輸出していきたいと思っています。

そしてこうした取組を具体的な実績に結びつけていくために、科学技術政策と産業政策の連携を強化し、日本の宇宙産業の国際競争力の強化につなげていきたいと考えています。

(おわりに)

最後に、古川宇宙飛行士が搭乗した国際宇宙ステーションで、日本、アメリカ、ロシア、カナダ、欧州が協力したように、宇宙開発には国際協力が不可欠です。したがって「日本人による有人火星探査」という大目標の実現のためには、国際協力を深めていかなければなりません。

その結果、いつの日か、世界と一緒に日本が作ったロケットで、他の国の宇宙飛行士とともに日本人宇宙飛行士が惑星探査に飛び立つ日が来れば、それは世界中に夢と希望を与えるとともに、私たち日本人にとっても大きな誇りとなります。そうした大きな将来の夢の実現に向けて、まずは内閣府に「宇宙政策委員会」や「宇宙戦略室」といった宇宙政策の司令塔を設置することを予定しています。

今年、日本再生に歩み始める最初の年、「日本再生元年」であります。私は宇宙開発担当大臣として、新たに設置する司令塔の下、次世代に夢を与えられる宇宙政策を企画立案、実行し、日本再生へとつなげていくことをここにお誓いをして、私の話を終わらせていただきます。

どうもご清聴ありがとうございました。

(以上)